ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて

第21号　2016年9月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）

連絡先　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム　labor と play を両立する教員と学校	冨岡　勝	2
逸話と世評で綴る女子教育史（21） ―芳英社女学校と水交女塾―	神辺　靖光	4
医学士森林太郎の苦悩の始まり ―千駄木@森鷗外記念館を訪れて―	谷本　宗生	7
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（21） 学校沿革史にみる補習科・専攻科（17）：鳥取県（4）	吉野　剛弘	9
近代日本における大学予備教育の研究㉑ ―早稲田大学附属高等学院の特修科③―	山本　剛	13
戦前における「学生生活調査」に関する研究（1）	山本　尚史	20
東京帝国大学実科の教育内容 ―学科課程の変遷③――	松嶋　哲哉	23
大阪市の女子教育⑫ ―西区女子手芸学校から大阪市立西区高等実修女学校へ―	徳山　倫子	29
戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑨ ―女子英学塾の宗教教育②―	ママトクロヴァ・ニルファル	33
学生寮の時代⑫ ―旧制中学の寄宿舎（生徒の生活空間）―	金澤　冬樹	37
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（19） ―東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その3)―	冨岡　勝	41
《開催報告》 旧制高等学校記念館 第21回夏期教育セミナー	金澤　冬樹	43
刊行要項（2015年6月15日現在）		46
編集後記		47

コラム

labor と play を両立する教員と学校

冨岡（とみおか）　勝（まさる）
（近畿大学）

先月、30数年ぶりに高校1年生のクラス会が開かれたので出身地の名古屋で一日を過ごした。

母校に集まった私たち元生徒たちに、当時の担任が30数年振りに英文解釈の特別授業をしてくれた。とりあげられたのは、イギリス出身の詩人W. H. Auden（1907年-1973年）が晩年に著した　A Certain　Worldという本の中の“Work, Labor, and Play”という文章であった。インターネットでチェックしてみたところ、大学入試に良く登場するらしい。その中に次のような一節があった。

> Between labor and play stands work. A man is a worker if he is personally interested in the job which society pays him to do;what from the point of view of society is necessary labor is from his own point of view voluntary play.

気軽に意訳すれば、本当の仕事（Work）というものは、社会から要請されておこなう労働（laborやjob）と遊びの要素も含む個人の自発的活動（play）の両側面をもつ、ということになるだろうか。

元担任は、この文章の内容が、30数年間の教員生活で目指したことであったと語った。たしかに当時から、playの要素とlaborの要素を併せもった教員であったような気がする。

フランス文学の研究に熱心で、授業では文学や文化などの話がかなり混ざるが、英文解釈の解説は親切で分かりやすかった。また学級指導には手間を惜しまず、4月のクラス委員決定のために日曜日を使ったクラスソフトボール大会、文化祭のクラス展示テーマを決めるためにお寺の庫裏を借りてのクラス合宿という具合であった。その一方、夏休みには悠々とイタリア旅行を楽しんでいた。さらに、筆者の卒業後には、オーケストラ部を起ち上げるともに、1年間で100号以上の学級通信をワープロで作成し、愛知県の私学同士のネットワーク活動にも精力的に取り組み、おそらく校内でもっとも多忙な勤務をしながら、オーラルコミュニケーションを主体とした授業を研究するためとい

う理由で数年間イギリスに出張するというマイペースさも持ち続けた。

必要な仕事に手を抜きすぎず、同時に自らのスタイルは何らかの形で活かしながら、それも仕事にしていく、なかなかよい暮らしぶりを貫いたことがこの元担任の話からうかがうことができる。

筆者の出身校である私立東海中学・高等学校には、こうした教員が多数存在しつづけきたようだ。浄土宗の僧侶養成学校→旧制中学校→新制中学・高等学校と変遷してきた学校であるが、共生（ともいき）教育をスローガンとする人間教育をやっていた土台の上に、戦後、宗派との関係の有無にかかわらず、実力と個性に富んだ教員が多数スカウトされ、教員の個性が尊重された上に生徒の個性も伸びていく、といった歴史であったようである。結果として、同校は官尊民卑と呼ばれる愛知県において公立の進学トップ校のライバル的存在の進学校という評価を得たが、単なる「進学校」として片付けるには惜しい豊富な歴史があるように思われる。

例えば、戦後まもない頃、市内の映画館に生徒が入り浸るのは風紀上好ましくないと考えられた頃に、校内に本格的な映写設備を導入して年間10数本もの映画を校内で上映していた[1]。近年では、男子校でありながら宝塚歌劇団風のミュージカルを毎年上演したり、さまざまな文化人などを招いた大規模な市民公開講座を生徒たちの手で実施する学校としても著名になり、そうした公開行事に年間約2万人の市民が参加しているらしい[2]。

全国の他の「進学校」にも、例えば筆者が史料調査でお世話になっている長野県松本深志高校、東京都立日比谷高校、兵庫県立神戸高校、それぞれ豊富な歴史がある。そうした歴史を、「進学校だからできた例外的な事例」として片付けずに、史料に基づいて具体的にどのようなことがあったのかを明らかにしながら、教育界全体に役立てていこうという発想が必要なのではないだろうかと、クラス会をきっかけに改めて考えた。

1　秦達之『学び舎にシネマを　東海学園映画上演二十年史』雁書館、1988年。

2　久田光政「生徒も父母も教員も　―東海中学・高等学校」尾木直樹編著『子どもが自立する学校』青灯社、2011年。

＊このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています。

逸話と世評で綴る女子教育史（21）
芳英社女学校と水交女塾

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

アメリカのキリスト教長老教会とオランダ改革派教会から派遣された宣教師によってつくられたフェリス女学校とA6番、B6番女学校発祥のいきさつを書いてきた。キリスト教ミッションの女学校としては、この外に日本組合基督教会の神戸英和女学校(神戸女学院)、同志社女学校、日本聖公会の照暗女学校、平安女学校、立教女学院、メソジスト教会の青山女学院、遺愛女学校、弘前女学校、活水女学校、カナダメソジスト教会の東洋英和女学校等まだまだたくさんある。これらは稿を改めて書きたい。

本稿は近代的女学校の“鍬卸し”(初発)として明治5、6年までにできた横浜東京の女学校について書いたので、その続きとして、その頃、東京にできた英語の私立女学校について述べよう。

明治5年5月、東京の神田佐柄木町に芳英社という私立女学校ができた。4年12月20日付で東京府に開学願書が提出されている。

> 方今、洋学御張皇之折柄、児女洋学舎取開度志願ニ付、両三年来、婦人教官之者専ラ長養罷在、未タ成業ニハ立至リ兼候得共、初学之者訓辱可致、学業ニハ相進居候間、此度神田佐柄木町私拝借地ニ於テ婦人英学設立仕度、此段御聞届被成下度奉懇願候
>
> 斎藤三助　(東京都公文書館蔵)

斎藤三助なる人物の経歴はわからない。ここ2、3年、女性の英語教師を養成してきた。まだ十分とは言えないが初学者には教えられるから、どうか児女の英語学校開校をお許しねがいたい。こういう文面である。東京府は即座にこれを許可した。

ここ2、3年養成したという英語教師は斎藤三助の妻・常（つね）であった。明治5

年5月の「新聞雑誌」に次の記事がある。

府下神田佐柄木町ニ於テ昨冬建設セル女学校芳英社ニテ5月12日ヨリ南校御雇教師ウヰルソン妻ハイレス併ニ当府貫属斎藤三助妻常女ノ両人、日々出張シ英学ヲ教授シ四方ノ佳人才女追々雲集セル由

学科は英語と数学で、正則と変則の二つのコースがあった。正則は英語でウィルソン夫人が教え、変則は日本語まじりで斉藤常が教えたのであろう。後に桜井女学校をたてた桜井ちか子(当時18歳で、桜井家に嫁したばかりの新嫁)が、この芳英社に入学し次の談話を遺している。要約すると、「ウィルソンリーダーとパーレー萬国史を習いましたが、わからない所があると築地の宣教師の所へ行ってききなさいと言われました。そこで築地のカロザース夫妻の教会の行き、それが縁故で新栄教会へ出入するようになり洗礼を受けました。芳英社で英語の手ほどきをされ、半年ぐらいたつと下の組を教えました。女生徒は100人ぐらいおりました」。

明治8年5月、芳英社は創立満3年を記念して教師生徒全員で写真をとり、これを遺品として解散した。「卒業写真の始」として石井研堂の『増訂明治事物起原』にでている。

明治5年2月、神田南佐柄木町に水交女塾が開かれた。

山下御門外南佐柄木街9番地所、星野天類寓居ニ於テ女子ニ英学ノ指南ヲ致シ、月謝其ノ規則等モ至便ニ定メタル由、最寄ノ者ハ就テ学ブベシ

と明治5年2月の「新聞雑誌」に載っている。5年3月付の「開学願書」をみよう。

第1大区9ノ小区南佐柄木町3番借店星野康斉奉申上侯。私女(むすめ)儀、是迄英学修行為致侯ニ付、今般女学私塾相設度侯得共、未浅学ニ依而本意を不遂侯。折柄幸静岡県士族・小林省三女(むすめ)ま佐事願済ニテ私

方ニ寄留、小女と同志ニ付、幼童ニ英学教導為致度、何卒開塾御免許ニ相成候様奉懇願候。

願人の星野康斉(天類)は医師で、その娘輝(てる)は福澤諭吉の弟子・古川正雄に英語を習った。当年15歳である。星野輝と一緒に英語を教えようとする小林正(まさ)は、元幕臣で開拓使出仕・小林省三の娘で、沼津兵学校の乙骨(おとこつ)太郎乙に英語を習い、目下、築地のカロザース夫人について勉強中であった、当時16歳。

まだ修業中の娘を教師として英語女学校を開いたのである。当時の英語教師で最年少は日洗舎で教えた13歳の沼口登利である。いささかクレージーな、この日洗舎にふれておこう、

日洗舎というこのクリーニング屋の名前のような女学校は明治5年2月に吉原遊廓のど真中にできた。設立者は遊廓の楼主・沼口美佐雄(清吉)で、遊女達に英語を教え、身を清めさせるため日洗舎と名づけたのである。教師の沼口登利は楼主・美佐雄の娘である。前述の芳英社で、校主の妻・斎藤常から英語を教わったと言う(明治6年・開学願書)。世間ずれした遊女達に13歳の少女が英語を教えられたであろうか。英語の学校とあれば、何事でも讃辞を送った当時の新聞も、さすがに日洗舎だけは例外で、遊女が英語で媚を売るなど、かえって文明開化の妨げになると警告している、

廃藩置県前後の明治4年頃から5年、6年にかけての東京は英語熱に煽られた。『新聞雑誌18号』は4年3月中の英学者16名をあげ門人323名の福澤諭吉をはじめ、鳴門義民、尺振八、箕作秋坪ら英学校の盛んなことを書きたてた。以後も歌舞伎役者の尾上菊五郎が英語を勉強したとか、銀座の弦妓が英学塾に通っているとかセンセーショナルにとりあげた。本稿の芳英社、水交女塾などもその一環である。これら女学校の生命は短かかった。

明治初年の英語女学校のことは一たん筆をとめる。本格的英語女学校は桜井ちかの桜井女学校から稿を改めて述べたい。

医学士森林太郎の苦悩の始まり
―千駄木@森鷗外記念館を訪れて―

谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

森鷗外（森林太郎）の旧居「観潮楼」跡地に、文京区立森鷗外記念館（文京区千駄木1－23－4）が開館している。地下スペースの展示室で鷗外にかかわる資料やパネル・映像などを見学でき、建物2階の図書室では鷗外関連の研究文献などが自由に閲覧利用できる。同館をふと見学した著者（谷本）は、従前の特別展図録「ドクトル・リンタロウ医学者としての鷗外」（2015年10月、全57頁）を興味深く感じ入手した次第である。本稿では、鷗外記念館の展示図録を参考にしながら青年森林太郎の足跡などを考えてみたいと思う。

森家は、代々津和野藩の御典医の家柄である。林太郎の父親は、幕末から明治初めに松本順や佐藤尚中らから和蘭医学を学んでいる。林太郎は、その父親から8歳（明治3年）で蘭語を学んでいる。林太郎は10歳（明治5年）で上京し、親戚筋にあたる西周宅（神田西小川町）に寄寓しながら本郷元町にある進文学社で独語を学び始める。翌明治6年、医学校予科に入学する。入学年齢の縛り？を不思議とクリアして。医学生らは寄宿舎生活を旨として、お雇い外国人教師らから独語などで講義授業を受ける。進級試験も厳しいながら、幼い時分より優秀であったとされる林太郎は本科に進級し、明治14年7月東京大学医学部を卒業する。当時の林太郎はペンをつねに所持していて、筆記が早く寄宿舎であまり清書することはなかったという。林太郎が医学生時代の自筆受講ノートも僅かながら現存していて、独語で科目の要点を纏めた分かりやすい形態となっている。

しかし、ずっと優秀であったはずの林太郎も年上？の優秀な同期らに圧倒されたのか、医学部卒業試験（臨床実験と口頭試問）の成績では席次8位という結果に終わる。成績上位の卒業生となり、欧米諸国への留学を果たし、帰国して医学部の大学教授となる医学研究者の道をきっと幼少時より目指

していたのであろう青年林太郎にとって、これは大きな挫折？であり、彼にとってのまさに苦悩の始まりといえよう。親友の賀古鶴所（席次21位）への書簡（明治14年11月20日付）には、当時の林太郎の本音と彼の行動判断の過程が吐露されている。卒業試験の成績評価を不本意とした林太郎は、大学医学部長の三宅秀を訪ね、大学からの派遣留学生としての可能性を率直に尋ねたという。三宅いわく、「選法ハ[卒業]試験成績ヲ主トス所詮卿ノ番ニナル可ラズ断念シテ然ル可シ」という回答で。そこで林太郎は、「然レハ矢張双親共ノ意ニ遵ヒ陸軍省ニ出仕ノ外ハ無御坐候」として周りが勧める陸軍医務局への入省を受け入れる。陸軍入省後にも、医学部を成績上位で卒業した同期生の三浦守治や高橋順太郎らが留学するのに対し、「羈官吾飲寒山馬、得意人攀絶海航」（明治15年2月23日、紀行日記「北游日乗」）と自身との違いを漢詩に詠んでいる。しかし幸いにも、明治17年独語に堪能な医学士であった林太郎に、陸軍省より陸軍医事制度調査及び軍陣衛生学研究を目的として、4年間の独逸留学が命じられることになる。軍医として意気込んで留学した林太郎にとって、当時最新の軍陣衛生学を現地で精力的に生き生き学んでいた様子が、彼の記した「独逸日記」などからよく分かる。

明治21年に帰国した林太郎は、早速自身が学んだ衛生学の知見を幅広く普及させるべく言論活動を介して奮闘することになる。穏健な秩序を望む医学界の長老や重鎮らとの激しい確執を生じながらも、留学経験によって国際的な動向を肌で感じた林太郎は、実験医学を中心とした研究体制をぜひ日本でも将来を見据えて確立すべきだと痛感する。大学卒業した当初は、自分一個人の立身出世を望むレヴェルの苦悩であったものが、将来の国の研究体制を憂うといった大いなる苦悩にまで深化していくのであろうか。明治40年、一般向けに口語文で分かりやすく衛生学の考えかたを纏めた『衛生学大意』を刊行する。その緒論で、「衛生学と云ふものは、僅か六十年以来の新しい学問である…人の健康を図る経済学のやうなものである。…釣合を取つて健康と云ふ態度の、そこなはれないやうに務める法を研究するものである。…空気は如何なる物か、飲食物は如何なるものかと云ふことを一々極めsなければならぬ」ものであると主張している。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（21）
学校沿革史にみる補習科・専攻科（17）：鳥取県（4）

吉野（よしの）　剛弘（たけひろ）（東京電機大学）

今号では、鳥取県の専攻科の生徒の動向を検討する。

前号では、鳥取東高等学校を例に、専攻科には定員を上回る志願者がいたことを明らかにした。鳥取県の専攻科は、一定の生徒数を抱えつづけたのである。

表１は、鳥取東高等学校、米子東高等学校、鳥取城北高等学校の専攻科の修了者の推移である。

全体として、定員を上回る修了者がいたことになる。修了者が入学者を上回ることはないので、必然的に表の数字以上の入学者を受け入れていたということである。

斜体は定員より少ない修了者の年度であるが、修了段階で定員を割っているということなので、入学段階での定員割れと同義ではない。しかし、鳥取東高等学校の 1979（昭和 54）・1980（昭和 55）年度の落ち込みが目立つ。前号でも検討したが、この時期の鳥取東高等学校は入学志願者も落ち込んでいたからである。入学志願者と同様に、共通一次試験の影響が推察される。

表 2 は、鳥取城北高等学校の専攻科のクラス数と生徒数の推移である。

上述の鳥取東高等学校とは異なり、共通一次試験の影響はない。1980 年代後半から 1990 年代前半にピークを迎えるが、これは第 2 次ベビーブーマーによるものであろう。

表1　鳥取県立高等学校専攻科の修了者数

年度	鳥取東		米子東		倉吉東	
		女子		女子		女子
1959(昭和34)	78	4				
1960(昭和35)	82	7	53	6		
1961(昭和36)	115	11	59	6	*44*	5
1962(昭和37)	100	11	59	10	*45*	4
1963(昭和38)	78	11	62	7	79	10
1964(昭和39)	88	13	56	6	50	6
1965(昭和40)	85	16	63	9	58	10
1966(昭和41)	130	15	123	16	115	25
1967(昭和42)	132	19	123	16	127	25
1968(昭和43)	115	19	126	21	117	19
1969(昭和44)	117	14	113	19	128	10
1970(昭和45)	115	15	112	19	*97*	13
1971(昭和46)	*84*	4	106	14	101	16
1972(昭和47)	101	9	126	17	100	13
1973(昭和48)	105	20	102	20	103	24
1974(昭和49)	138	24	118	23	110	13
1975(昭和50)	146	27	115	23	110	16
1976(昭和51)	126	27	117	23	123	24
1977(昭和52)	117	26	114	23	123	20
1978(昭和53)	100	18	110	14	115	16
1979(昭和54)	*87*	19	125	24	113	16
1980(昭和55)	*79*	18	126	25	110	16
1981(昭和56)	112	36	120	25	113	25
1982(昭和57)	132	23	123	32	117	33
1983(昭和58)	128	32	127	23	122	37
1984(昭和59)	102	29	127	24	114	32
1985(昭和60)	117	22	116	26	122	29
1986(昭和61)	119	38	109	31	115	21
1987(昭和62)	113	18	117	37	110	28
1988(昭和63)	124	32	126	36	101	28

浜田英一「鳥取県立高等学校専攻科30年の歩み」『研究紀要』第26号(1990), p.61より作成

女子は内数

斜体は定員より少ない修了者

表2　鳥取城北高等学校専攻科の生徒数

年度	クラス数	生徒数
1976(昭和51)	3	150
1977(昭和52)	3	163
1978(昭和53)	3	151
1979(昭和54)	3	169
1980(昭和55)	3	178
1981(昭和56)	4	200
1982(昭和57)	4	207
1983(昭和58)	5	180
1984(昭和59)	4	200
1985(昭和60)	4	192
1986(昭和61)	4	222
1987(昭和62)	5	266
1988(昭和63)	5	260
1989(平成1)	5	260
1990(平成2)	5	276
1991(平成3)	5	175
1992(平成4)	4	182
1993(平成5)	4	160
1994(平成6)	4	174
1995(平成7)	5	225
1996(平成8)	4	164
1997(平成9)	4	148
1998(平成10)	3	87
1999(平成11)	3	92
2000(平成12)	3	107
2001(平成13)	3	69
2002(平成14)	3	102
2003(平成15)	3	60

『翔　学校法人矢谷学園鳥取城北高等学校五〇周年記念誌』(鳥取城北高等学校五十年誌編纂委員会，2013)，p.213より作成

鳥取城北高等学校の専攻科は、2003（平成 15）年度をもって閉鎖されるのだが、最後の年度でも 60 名の生徒を抱えていた。ピーク時に比べて生徒数が減っていることは事実であるが、決してニーズがなくなっているわけではないということは、注意を要する。

県立高等学校専攻科の閉鎖の過程については、平木耕平「公立高校専攻科・補習科からみた<地方からの大学進学>―鳥取県を中心とした政治社会学的考察」『教育社会学研究』第 83 集（2008）に詳しいが、そこでも生徒がいなくなったから閉鎖されたわけではないことに触れられている。専攻科閉鎖の過程については、他にも検討を要する点が多くあるが、2000 年代のことであり、歴史として語りうるのかという感は否めない。詳細な検討は他日に期したい。

近代日本における大学予備教育の研究㉑
―早稲田大学附属高等学院の特修科③―

山本（やまもと）　剛（たけし）(早稲田大学大学史資料センター)

はじめに

前号に引き続き早稲田大学附属高等学院(以下、高等学院) で、1941(昭和16)年に新たな学科目として設置された特修科について検討する。本号では、特修科の教授内容である。

特修科の教育

高等教育機関では、1941(昭和16)年公布の「大学学部等ノ在学年限又ハ修業年限ノ臨時短縮ニ関スル件」をはじめとして、43(昭和18)年には、高等学校令および大学令が改正され、高等学校と大学予科の修業年限は2ヶ年に短縮された。さらに勤労作業の浸透や報国団活動等の重視による教育上の影響を受けていたことは周知の通りである。早稲田大学では、1942(昭和17)年よりこれまで修業年限2年制の第二高等学院を3年制に改正する措置を講じた[1]。これに関する詳細な考察は別稿で分析することにするが、ここで3年制を採用する理由として、「学力」の問題があげられていた。すなわち、一連の戦時体制下の臨時措置による政策のもとで、学力低下への強い危機感が顕わになっていたのである。加えて、大学では錬成教育の実践のなかで、「錬成」と「学問」との関係が絶えず問われていたことは、先行研究で明らかにされている[2]。

こうしたなかで、早稲田大学の状況をよく示しているのが、次のような発言である。

同大学の教授であり学徒錬成部主事であった今田竹千代は、学徒錬成部の内容を報告した座談会で、「智的方面」における「錬成」を以下のように述べている[3]。

(早稲田大学の－引用者)両学院は午前学科午後錬成といふ組織に改めたわけです。(中略－引用者)　例へばドイツ語部で曾てチャンピオンとし活動してをつたやうな者は、やはりその自主的創造的活動の余地を与へまして、そこで午前は一応一定の定められた時間をやるのですが、ドイツ語ならドイツ語、支那語なら支那語に特に秀でた者には、午後には充分な時間を与へてこれをやらせる。それは智的方面における錬成だと思います。

このような今田の発言からは、反主知主義的な生活統制を強いる戦時下の教育政策に対応して、「学問」という基本的な責務をもつ大学の意識を表していると考えられる[4]。特修科では、語学や学芸を重視したことはすでにふれた。ここで錬成教育の実践を行うなかで、同学院が、智的方面に充分な学習の時間を与えることが「錬成」だと捉えていることは注目できる。すなわち、高等学院では、学徒練成部の「錬成」に加えて、独自に特修科を設置することで、語学などの能力のある生徒には「天才ノ発揮伸長」の機会を与え、生徒の「自発的能動的攻学態度」を育成することで学力を維持する意図があったと言えよう。

それでは、特修科の諸科目ではどのような教育が行われたのだろうか。次の表は、文部省に提出された学則改正の申請書にある「昭和十六年度第二高等学院特修科表」と明記された特修科の科目である[5]。この特修科表には、班名、班区分、担任教授の氏名、研究項目、指定時間数が記載されている。そのうち班名と研究項目を摘記すると以下のようであった。なお、ここでは班名と研究項目のみを摘記した関係で、研究項目については重複する項目もあるが、それは各担当教員が別であることは確認しておきたい。

表　1941(昭和16)年度　第二高等学院特修科表

一、哲学及科学特修科	
班名	研究項目
①哲学特修班	民族心理研究、比較文化論、研究指導、社会倫理学、世界観研究、研究指導
②史学及社会学特修班	近世独逸思潮研究、日本精神ト日本文化、研究指導、世界現勢研究、支那最近世史、民族学研究、研究指導、世界史研究、世界地政治学、人文地理、社会学的研究法、社会調査実習指導
③政治経済特修班	計画経済研究、経済学研究、研究指導、国策及世界政治研究、世界産業地理研究、研究指導、国防国家論、世界政治研究、研究指導
④自然科学及技術特修班	世界主要各地自然環境ノ研究、(気候、地勢、生産物等)其他研究指導、生物学特殊研究、研究指導、地球物理学研究、海洋研究(国防、産業、交通)、産業技術研究、研究指導
⑤国防科学及技術特修班	国防科学研究(軍事学、戦史)、研究指導、国防科学研究(技術、資源、国土地理)、東亜及世界国土計画研究
二、語学及芸術特修科	
班名	研究項目及指導課題
①国語特修班	各代作品鑑賞(近世)、各代作品鑑賞(近古)、研究指導、各代作品鑑賞(軍記)、能研究、研究指導
②漢文特修班	各代作品鑑賞、詩作研究、支那文学研究、日支文化交渉研究、支那思想研究、中国近代文学批評
③英語特修班	音声学(国語及英語)、修辞学研究、作品鑑賞指導、時文研究、言語学、風物制度研究、文学史研究、小説、評論解説指導、会話、オレイシヨン指導、会話、タイプライター実習、小説鑑賞指導、時文解説研究、エッセー解説指

	導、演劇鑑賞、エッセー研究、翻訳法指導(英文和訳、和文英訳)、会話、会話、タイプライター実習
④独逸語特修班	各代作品鑑賞指導、独文法特殊研究、会話、各代作品鑑賞指導、独文法特殊研究、会話、劇、詩朗読研究、独語中古文法研究、会話、各代作品鑑賞指導、各代作品鑑賞指導、会話
⑤仏蘭西語特修班	作品鑑賞指導、文法特殊研究、会話、作品鑑賞指導、作品鑑賞指導、会話
⑥露西亜語特修班	文法研究、作品鑑賞指導、会話、作品鑑賞指導、会話
⑦支那語特修班	文法研究、支那風物研究、会話、支那現代小説鑑賞、会話
⑧創作指導特修班	和歌、俳句研究、創作指導、小説、劇、シナリオ研究、創作指導
⑨劇研究特修班	朗読、演劇、映画等ノ研究及実習指導
⑩美術特修班	美術史、絵画、写真、舞台装置、建築美術、都市計画、実習
⑪音楽特修班	音楽史、音楽理論、作曲法、実習指導

この他にも、3「国防、武道、競技特修科」が設置された。すなわち、①「国防特修班」として、射撃班、馬術班、銃剣術班、自動車班、滑空班、航空班、戦車班、国防研究班、②「武道特修班」として、剣道班、柔道班、弓道班、空手班、③「運動競技特修班」として、体操班、競走班、水泳班、蹴球班、ラグビー班、野球班、庭球班、ホッケー班、端艇班、籠球班、送球班、鎧球班、角力班、拳闘班、レスリング班、卓球班、スキー班、山岳班が設置され、これらはいずれも学徒練成部の管轄下に置かれた。

以上のように、「哲学及科学」、「語学及芸術」、「国防武道競技」の3つの特修科に分けて、そのうちに班が設定されていた。そこで実際の同学院特修科の科目編成は、この申請書をもとにそれぞれの研究項目の設定と教員が配置されることとなった[6]。

こうした特修科の研究項目は、たしかに「国防、武道、競技特修科」という「体躯」を「練磨」する科目が設置されているが[7]、その一方で、語学などの科目が重視されていたことは注目する必要がある。
また、早稲田大学大学史資料センター所蔵の特修科関連資料では、『特修科関係書類(一)　第一早稲田高等学院』と『昭和十六年四月特修科関係書類(二)　第一早稲田高等学院』の2冊が所蔵されている[8]。前者には「早稲田大学附属高等学院教育内容改善案」として、これまで本稿で考察してきた認可申請書と同様の書類が綴じられており、後者には、主に「特修科選択に関する注意」として、特修科を選択する際の注意事項が記された文書が綴じられている。この注意事項によると、特修科の選択のうえで、英文学専攻志望者には英文学史、建築専攻志望者には自在画を選択させるなど、生徒には学部の専攻志望に応じて、それぞれの科目を選択させていたことが窺える[9]。すなわち、特修科は学部進学のための「基礎訓練」でもあった。
特修科は、大学教育のための基礎教育として位置づけられていたのである。
さらに、特修科では、その研究成果が「研究発表会」として公開された。試しに1941(昭和16年)11月29日付の『第一回研究発表会』の冊子をみると、班ごとの研究項目の発表内容の概略が窺える[10]。紙幅の関係で詳細な内容の考察は別稿で検討するが、戦時下のもとで研究発表会が行われたことは注目できる。
なお、上記の研究項目は第二高等学院に設置予定されたものであり、前号でふれた「特修科実施ニ関スル要綱」には「備考」として、第一高等学院もこの研究項目に準じて特修科が設置されると明記されている。同大学の1941(昭和16)年度の『学科配当表』によると、第一高等学院の特修科は、先の「特修科内容」で特修科設置予定の科目として記載された「1、語学特修班、2、文化特修班、3、科学特修班、4、芸術特修班、5、国防武道競技特修班」の5班が設置されていたことが窺える[11]。
以上、高等学院ではこのような研究項目を設定して、研究指導がなされた。こうして設置されたものは、学科目の枠を超えて、「生徒の個性を重視しながら」能力のある者に学習の機会を与え、生徒に「学問」に触れさせる契機となったのである。それは、一方で、錬成組織の強化のなかで「学力低下」に対処する方策であり、学部進学のための「基礎訓練」であった。特修科は、学

力低下への危機感が顕わになるなかでの具体的な教育施策であったと言えよう。

おわりに

以上、本レターでは、戦時体制下における早稲田大学附属高等学院の教育内容に着目し、1941(昭和16)年に設置された特修科の内容を考察した。

その際、戦時下の錬成組織の強化のなかで、同学院は「学力低下」への問題に対してどのような教育を行ったかを視点として、特修科を分析した。

特修科の内容に関しては、本文で考察した通りであるが、選択必修科目としての研究項目を設定して、教員の指導が行われていたことは注目できる。ところで、翌42(昭和17)年発行の『早稲田大学案内』には、特修科について同学院を志望する者のために以下の紹介文を掲載している[12]。すなわち、「特修科研究指導項目を数えれば実にその数は百項目に垂んとしている。生徒をして研究項目及び指導教員を単位として、一単位乃至三単位を選ばしめ、選択した以上は必修で試験を課し、不合格の場合は落第せしめることになつている」。また、既述した第1回研究発表会に関しても、「全国にその前例を見ぬ特修科とはいかなるものかとの期待と好奇から早朝続々と父兄、学生の群が押し掛け、口演形式、朗読形式、対話形式の各発表と文化映画、劇映画等の映画形式、劇形式による古典劇、英語劇、独逸語劇、仏蘭西語劇、実演による武道(柔、剣、弓)、体操、空手等が午前八時より大隈講堂で夜八時迄繰展げられ」た。

再三述べるように、こうした研究成果の発表会が行われることは、その学術水準は高く、教育的効果もあったと推察される。

戦時体制下の臨時措置のもと修業年限の短縮、勤労動員の日常化、そして学校の兵営化が進行するなかで、同学院では特修科により学科目の枠をこえた研究項目を設定し、教員が指導した。このことは学力不足が憂慮されるなかで、限られた学習時間で能力のある者は「学問」をするという理念であり、反主知主義的な生活統制を強いる施策に対抗した実践でもある。

今後の課題としては、実際の研究項目の詳細な分析を行うことである。そこで、具体的にはどのような研究が行われ、生徒はどのようにそれらを受容したのかを究明する必要がある。さらに、他大学予科の事例の研究を進めたい。

[1] 教務課『自昭和十五年度年報』早稲田大学大学史資料センター所蔵。なお、早稲田大学では、修業年限3年制の第一早稲田高等学院と2年制の第二高等学院を設置していた。

[2] 寺﨑昌男「高等教育諸学校」、寺﨑昌男編『総力戦体制と教育－皇国民「錬成」の理念と実践－』(1987年、東京大学出版会)。

[3] 座談会「学徒錬成の精神」『知性』5月号所収、(1942年、河出書房)、55頁。同前書「高等教育諸学校」、191頁を参照。

[4] 前掲書「高等教育諸学校」で、寺﨑は、この今田の発言について、大学に、「有為ノ人材」「指導的人物」の育成を期待せざるをえない、という教育方針は、錬成教育体制のもとでは、むしろ鋭いエリート主義となってあらわれると指摘している。191頁。

[5]「昭和十六年度第二高等学院特修科表」『早稲田大学学則中変更認可ノ件』昭和16年4月11日、国立公文書館所蔵。

[6] 早稲田大学大学史資料センター所蔵の『学科配当表』では、1941(昭和16)年度、42(昭和17)年度、43(昭和18)年度の両学院特修科の編成が確認できる。

[7] 『資料　教育審議会(総説)』(1991年、野間教育研究所紀要34集)、「高等学校ニ関スル要綱」153頁－155頁を参照。

[8] 『特修科関係書類(一)　第一早稲田高等学院』『昭和十六年四月特修科関係書類(二)　第一早稲田高等学院』、早稲田大学大学史資料センター所蔵。

[9] 同前書『昭和十六年四月特修科関係書類(二)　第一早稲田高等学院』。なお、ここで記載されている特修科は第一高等学院のものであり、「1、語学特修班、2、文化特修班、3、科学特修班、4、芸術特修班、5、国防武道競技特修班」の5班である。

[10]『第二早稲田高等学院特修科　第一回研究発表会』1941(昭和16年)11月29日付、早稲田大学大学史資料センター所蔵。なお、研究発表大会に関しては、現在、1942(昭和17)年第2回大会12月6日の第二早稲田高等学院特修科　第二回研究発表会』が確認できる。

[11] 『昭和16年度　学科配当表』、早稲田大学大学史資料センター所蔵。

[12]「両学院特修教育」『早稲田大学案内』昭和17年度版、早稲田大学新聞社編、(丸善株式会社、奥付なし)、224頁－227頁。

戦前における「学生生活調査」に関する研究（1）

山本（やまもと）　尚史（ひさし）（長崎女子短期大学）

このニューズレターにはこれまでに2回コラムを書かせていただいたが、愈々、書かなければと思い、手を挙げさせていただいた。まずは1年間、書ききってみようと思う。皆様よろしくお願いします。このように思った契機は8月28日に松本市で開催された旧制高等学校記念館主催の第21回夏期教育セミナーで「戦前の「学生生活調査」に関する基礎的研究　～帝国大学を中心に～」という題目で発表させていただいたことだ。レターで書かせていただく内容は松本での発表をもとに発展させていく。

1.本研究の目的

1925（大正14）年に東京帝国大学が実施した「学生生計調査」以来、多くの学生生活に関する調査が実施されてきた[1]。その具体的な内容は、「下宿代、身上関係諸事項、健康、通学距離・時間、睡眠時間、勉強時間」などで、調査の多くは学生生徒個人に着眼してなされ、調査項目も1、2個に限ってなされる場合が多かった[2]。

文部省思想局は1936（昭和11）年当時、実施されていた調査について「下宿代、身上関係諸事項、健康、通学距離・時間、睡眠時間、勉強時間」ばかりではなく、「広く学生生徒の学資関係、身上関係、生活様式一般に関する統計的調査（中略）即ち学生生活調査或は学生生計調査」と述べている。これは従来の調査項目に「学資関係」「身上関係」「生活様式一般」などの分類を設け、「学生生活調査或は学生生計調査」として位置づけたのである[3]。

本研究では、1925（大正14）年から1938（昭和13）年にかけて高等教育

機関によって実施された学生生活に関する調査が、何を目的にし、何を問題とし、どのように調査されていったのかを検討することを目的とする。

先行研究では荻野富士夫氏に学ぶことが多いが、荻野氏はこれまで「学生生活調査」について、学生の左傾化を防ぐために実施されてきたことを指摘している[4]。しかし「学生生活調査」の実施主体である大学は、この調査から何を成果として得たのか、また、経年的に調査項目を検討していくとどのような変化が見受けられるのか、この調査を巡るこうした具体的な検討はなされてこなかった。そこで、本研究では学生生活に関する調査の実態をめぐる基礎的研究として、調査の概要、その目的、そして調査項目の変化について明らかにしていきたい。

2.「学生生活調査」の実施実績

「学生生活調査」はどのくらい実施されていたのか。文部省によると、1932（昭和7）年以前の調査実績は「昭和七年度以前の調査報告は帝国大学に一、官立大学に三、私立大学に一、官立高等学校に二が数へらる」と記録されている[5]。これらの調査に変化が見えるのが1935（昭和10）年である。文部省は全国の高等教育機関に「本省に於いては昭和十年五月四日付を以て全国直轄学校、官公私立大学、高等・専門学校に対し「学生生徒ノ生計若シクハ広ク其ノ生活」に関する調査印刷物、其の他「学生生徒ノ生活ニ関スル調査ニ非ルモ学生生活ニ触ルル」調査物等に付照会を発した」としており、全国規模で学生生徒の生活に関する調査の実施状況を調査している[6]。この照会に応じて出された報告のうち、文部省が「学生生活調査」と判断したものが帝国大学6校、官立大学12校、公立大学2校、私立大学25校の計45校までに増加する[7]。この文部省の通牒の後、1938（昭和13）年の秋には、全国一斉に学生（生徒）生活調査が行われることになる。

次号からは、具体的に調査報告書を検討することにしよう。

---

[1] 東京帝国大学では「之（1929年調査）に類する調査は、既に大正十四年十二月中旬及昭和四年十月下旬の二回実施せられて居る」（文部省思想局「東京帝国大学　学生生活調査」『思想調査資料』第28輯、1935年7月）とある。

[2] 文部省思想局「調査　学生生徒の生活に関する調査」『思想調査資料』第32輯、1936年8月。なお、調査は定期的に又は臨時的に行われたようである。

[3] 同上

[4] 荻野富士夫『戦前文部省の治安機能　思想善導から教学練成へ』校倉書房、2007年

[5] 前掲「調査　学生生徒の生活に関する調査」『思想調査資料』第32輯

[6] 同上。

[7] 同上。

東京帝国大学実科の教育内容
――学科課程の変遷③―――

松嶋（まつしま）　哲哉（てつや）（日本大学　研究員）

前号に続き、本号でも東京帝国大学農科大学（学部）実科の教育内容を明らかにするために、学科課程を明らかにしていきたい。

3.　1926年の学科課程改正

1926年、実科の学科課程は改正される（学科課程は次頁参照[1]）。この改正の背景には駒場校友会による「内容改善」要求があったとされる。『母校独立記念号』では、「内容改善に関しては各科学生並に卒業生との協議会を各別に開いて、其の結果を原副会頭の手に纏めて町田部長に手交した町田部長は其れに従つて各科教授会を開いて大体吾々の案に近い案を作製し、実科総主任の手に提出し之に依つて町田実科総主任と総長との間に種々の交渉を開始したのである」とされている[2]。

26年改正の特徴を先にまとめれば、「農村指導者」の育成を強調したものと考えられる[3]。そのことを明らかにするために、まず学科課程の変更点を確認したい。学科課程の変更点をまとめれば以下の通りとなる（時間数の増減は割愛）。

新設科目

地理学及気象学（1年）、数学（1年）、農具論（1年）、栽培汎論及育種論（2年）、植物病理学及細菌学（2年）、産業組合論（2年）、病理学及細菌学実験（2年）、独逸語（3年）、測量実習及製図（3年）

履修学年の変更

養蚕論（2年→1年）、害虫論（1年→2年）、法律大意及農業法（2年→3

年)、植物学実験(2年→1年)、化学実験(3年→2年)

科目の削除

農業工学(2年)、作物(3年)、園芸学(3年)、畜産学(3年)

農学実科学科課程表(1926年改正)

学年	科目	夏学期	冬学期	合計
第1年	地理学及気象学	2	2	4
	化学	3	3	6
	植物学	2	2	4
	動物学	2	2	4
	地質学	3	−	3
	土壌学	3	−	3
	肥料学	−	3	3
	数学	2	2	4
	農業工学	2	3	5
	養蚕学	−	3	3
	農具論	−	2	2
	英語	5	5	10
	植物学実験	1回	1回	2回
	農場実習	4回	3回	7回
合計		24 (5回)	27 (4回)	51 (9回)
第2年	栽培汎論及育種論	−	3	3
	作物論	4	3	7
	園芸論	3	3	6
	畜産学	3	3	6
	植物病理学及細菌学	3	−	3
	害虫論	−	3	3

	家畜飼養論	2	–	2
	経済学	2	2	4
	産業組合論	–	2	2
	英語	3	2	5
	化学実験	2 回	–	2 回
	植物病理学及細菌学実験	–	1 回	1 回
	動物学実験	1 回	1 回	2 回
	農場実習	3 回	3 回	6 回
合計		20（6 回）	21（5 回）	41（11 回）
第 3 年	農産製造学	2	2	4
	農業経済学	3	3	6
	農政学	3	3	6
	法律大意及農業法律	3	3	6
	獣医学大意	–	2	2
	林学大意	–	2	2
	独逸語	4	4	8
	測量実習及製図	2 回	2 回	4 回
	農学実験	1 回	1 回	2 回
	農学演習	1 回	1 回	2 回
	農場実習	3 回	2 回	5 回
合計		15（7 回）	19（6 回）	34（13 回）

26年改正で注目すべき点は、3つある。第一に、第3学年において、作物、園芸学、畜産学など「実科」的な科目が削除されていることである。そのこと

によって、第3学年の科目が「アカデミック」な内容と実験・実習・演習科目だけになったのである。

第二に、1926年改正によって追加された産業組合論という科目に注目したい。26年時点で設置されていた官立の農業系専門学校[4]と北海道帝国大学農学部農学実科の学科課程の中には産業組合論は設置されていなかった。つまりは、実科の教育課程の特徴として産業組合論の設置を指摘することができる。

この産業組合論という授業で何が行われていたのか具体的なことはわからない。そこで、傍証的にはなるが、白井鋼之助『産業組合論』(東京農業大学出版部、1934年)の内容から産業組合論の中を明らかにしてみたい。ちなみに、同書の表紙には東京帝国大学農学部農学第一講座担任の「佐藤寛次閲」とある。

同書によれば、産業組合は農村振興のために必要不可欠なものであると説明する。つまり、恐慌による農村不況の対策として行われていた農山漁村経済更生運動の中心に産業組合を位置づけるのである。「経済更生運動は産業組合の運用を以て根幹と為すべしとせられ、農林省は経済更生部を創設し、永遠の国策として全国的経済更生運動の中枢となすに至った」[5]。「農家が更生の曙光を認め得らるべき訳で是等の多くは何れも産業組合の巧みな運営によつて解決せらるべき問題なのである」[6]。といったように、農村救済の中心に産業組合を位置づけるのであった。

このように、農村救済の中心に産業組合を位置づけるならば、農村の指導者層は産業組合の知識が必要不可欠となる。もちろん、この著書が実科での教科書であったわけではないし、同書は農村救済の中心として産業組合を位置づけていたため、26年改正で同様の理由から導入されたとは判断できない。しかし、農村改良のために産業組合の知識が必要とされてきたということは推察できるであろう。

第三に、農場実習が回数で表記されるようになったことである。これまでの農場実習は「通年」だったと思われるが[7]、この改正によって、3年間で18回となった。回数自体は、実験科目に比べたら多いが「通年」から回数表記に変わったことによって、農場実習の回数が制限されることになった。

以上のことから、1926年、学科課程改正の特徴は、「農村指導者」の育成を意識した点にあると考えることができる。それは、3年時における「実科」的科目の欠如と「アカデミック」科目への集中、産業組合論という科目の新設、農場実習の制限に見えてくる。

この後、学科課程は駒場校友会の要求もあり、もう一度改正される。駒場校友会は「実科教育内容の改善に就いては、……漸く実科意識が強度になるになると共に再び問題化し昭和五年に再び希望条項を学校当局に出して、改善を迫つた」ようである[8]。

1933年度『東京帝国大学一覧』の学科課程を参照すると[9]、この改正の変更点は、2・3年において体操の新設、農学実験が「特別講義及実験」に変わっただけであった。駒場校友会も「右の希望は必ずしも、全部が全部学校当局の容るゝ処とはならなかったが、少なくとも其意志のある処は、学校当局に通じて、曲がりなりにも改正せられるる処大なるものがあつた」と苦しい表現となっている。

おわりに

これまで、東京帝国大学農科大学（学部）実科の学科課程の変化を明らかにしてきた。最後に、その要点を簡単にまとめると、①実科は農場実習を通年で課していたが、1926年改正によって回数制となったこと。②1913年改正によって、実験・演習科目が設けられ、特に演習科目が設置されたことは実科の特徴であったこと。③1926年改正によって、「農業指導者」の育成を強調した学科課程に変わったことが指摘できる。

以上のことをまとめると、実科の学科課程は「実科」的な学科課程から、

「農村指導者」を育成するための学科課程に変わっていったと考えられる。それはつまり、実科の役割が、農業実務を担う人材から指導者の育成へと転換していったことを示すのではないだろうか。このことを結論といえるほど、充分な分析ができているかは自信がないため、その当否は批判を待ちたい。少なくとも、学科課程の分析からこのような仮説が明らかになったのではないだろうか。

---

[1] 『東京帝国大学一覧』大正15至昭和2年（国立国会図書館デジタルコレクション）。

[2] 駒場校友会編『母校独立記念号』1936年、263頁。

[3] 『東京大学百年史　部局史二』（1987年）によれば、「近藤康男の見解によれば、農場実習を重要な支えとして行われてきた実科の教育は、斎藤万吉から原熙に交替するに及んでそれまでの老農的色彩の後退であり、農村指導者というサラリーマン教育への移動であった」と指摘している（687～688頁）。

[4] 1926年度『一覧』に掲載されていた学科課程を参照した。対象校は、盛岡高等農林学校、鹿児島高等農林学校、鳥取高等農業学校、三重高等農林学校、宇都宮高等農林学校、岐阜高等農林学校、宮崎高等農林学校である。なお、宇都宮高等農林学校については、1926年『一覧』を発見することが出来なかったため、1930年度の『一覧』を参照した。

[5] 白井鋼之助『産業組合論』東京農業大学出版部、1934年、161頁。

[6] 同前書、162頁。

[7] 農場実習は、1908年度の『東京帝国大学一覧』以降空欄となっていた。しかし、それ以前は「通年」と記載されており、農業実習を行わなくなったとは考えづらいことから、空欄は「通年」表記を省略したものと考えられる。

[8] 駒場校友会、前掲書、291頁。

[9] 国立国会図書館デジタルコレクションでは、1931年、1932年の『一覧』が欠如しているため、何年に改正されたかは明らかでない。

大阪市の女子教育⑫
―西区女子手芸学校から大阪市立西区高等実修女学校へ―

徳山（とくやま）　倫子（りんこ）（京都大学大学院・日本学術振興会特別研究員DC2）

前回まで検討してきた西区女子手芸学校は 1921（大正 10）年に廃校となり、その跡地には大阪市立西区高等実修女学校（「実業学校令」中の「職業学校規定」による職業学校）が設置された。

大阪市立大学の学校沿革史においては、この大阪市立西区高等実修女学校が同大学家政学部（現・生活科学部）の「源流」と位置づけられており、西区女子手芸学校についてはほぼ言及されていない[1]。筆者は本ニューズレター第 9 号 18 頁（この連載の第 1 回目）で、「同校における女子教育の源流は 1908（明治 41）年に設置された西区女子手芸学校まで遡ることができると考えている」と述べた[2]。1937（昭和 12 年）に発行された大阪市立高等西華女学校（大阪市立西区高等実修女学校の改称後の校名）の『創立拾七年沿革略史』[3]44 頁においては、「本校の前身手芸学校を廃止し、同時に本校を創設したものなれば」（傍点は引用者による）という文章があり、当時の教職員は西区女子手芸学校を「前身」と捉えていたことが判る。今回は、『創立拾七年沿革略史』を用いて、西区女子手芸学校から大阪市立西区高等実修女学校への改変に際の引き継ぎがどのように行われたのかを確認したい。

●校舎

校舎については、先述のように西区女子手芸学校から大阪市立西区高等実修女学校へと引き継がれた。これは余談であるが、大阪市西区江戸堀に所在した校舎は木造 2 階建てで、西区女子手芸学校の校舎として使用され

る以前は、府立市岡高等女学校や西区第三高等小学校の仮校舎となった時期もあり、使い古された校舎であった。そのため、当時の生徒はこの校舎での思い出を以下のように綴っている。

> 入学した当時には、本当に汚い、狭い校舎だと憤慨した。運動場といつても、僅な面積で、屋内の方は板敷であつたし、屋外の方は煉瓦敷ではあつたけれど、へこんだところや、破れたところ等もあつて、体操の時に随分とこまらされた。体操の時の先生も「狭くてこまりすネー」と口ぐせの様に申して居られた事を私はよく覚えてゐる。
> （中略）
> 又講堂といひ、職員室といひ、それはそれは女学校として恥づかしい様な、狭苦しい貧弱なものであつた。或教室は畳の上に机を並べて、そして畳をふんで勉強する所もあつた。
> 私は之には随分驚かされた。土下駄をぬいで手をつくところ、食事をする畳の上に靴をはいて、しかも平気で踏むんですもの、私はどんなに貧しくなつても、此の様な真似はしたくないと思つた。[4]

●生徒

西区女子手芸学校は高等小学校卒業生を対象とする 2 年制の学校であり、大阪市立西区高等実修女学校は尋常小学校卒業生を対象とする 4 年制の学校であった。西区女子手芸学校が廃止される際には生徒が引き継がれ、生徒は本科第 4 学年もしくは補習科の生徒として大阪市立西区高等実修女学校に収容されることとなった。また、西区女子手芸学校へ通う予定であった西区第一高等小学校の卒業生は編入試験の上、本科第 3 学年の生徒となった（この措置に関しては翌 1922（大正 11）年まで続けられた）[5]。このことから、校舎のみでなく生徒も引き継がれていたことが判る。

ただし、職業学校であった大阪市立西区高等実修女学校は専検指定を受け、「高等女学校と同等」と認められていたのであるが、これについては「大正十二年三月以後ノ卒業生ニ限ル」とされ[6]、1921(大正 11)年度卒業生、つまり、学校開校初年度に編入試験を受けて入学した学年から認められていた。女子手芸学校から生徒は編入されたが、卒業後に得られる資格には変更が加えられることとなった。

●教員

生徒は先述のような形で引き継がれたが、教員に関しては「そう簡単にはゆかぬ」という状況であったようであり、十数名の教員に入れ替えがあったという[7]。「簡単にゆか」なかった要因としては、やはり、専検指定を受けるに際して、中等学校で教える資格を持つ教員を補充しなければならなかったということが考えられる。

以上、簡単にではあるが、西区女子手芸学校から大阪市立西区高等実修女学校への改変に際して、校舎・生徒・教員に着目して引き継ぎがいかにして行われたのかを検討した。西区女子手芸学校については大阪市立大学の沿革史にはほとんど記載されていないが、これまでのニューズレターで検討してきたように、明らかにできることも多々あるのである。

次回からは、大阪市立西区高等実修女学校について検討したい。

---

[1] 大阪市立大学家政学部の源流として戦前期の女学校についての記述がある大阪市立大学の学校沿革史は、大阪市立大学百年史編集委員会『大阪市立大学百年史　全学編　上巻』(大阪市立大学、1987 年、297-301 頁)、大阪市立大学百年史編集委員会『大阪市立大学百年史　全学編

下巻』(大阪市立大学、1987 年、1013-1019 頁)、大阪市立大学 125 年史編纂委員会『大阪市立大学の 125 年―1980～2005 年―』(大阪市立大学、2007 年、49-51・54-55 頁)である。そのなかで、西区女子手芸学校については、「大阪市立西区女子実修女学校は、西区女子手芸学校跡を仮校舎とし、西区費で運営された。」としか記述されていない(『大阪市立大学百年史　全学編　上巻』、298 頁)。

[2] ちょうど 1 年も前に引いた伏線を今頃になって回収することになったのは、ひとえに筆者の計算違いのせいである(もっと早く今回の内容に辿り着けると思っていた)。読者諸氏にはこの場に変えて謝罪と弁明をさせていただく。

[3] 国立国会図書館デジタルコレクションより閲覧。

[4] 大阪市立高等西華女学校『創立拾七年沿革略史』(1937 年、22-24 頁)。

[5] 大阪市立高等西華女学校『創立拾七年沿革略史』(1937 年、22-46 頁)。

[6] 大阪市立高等西華女学校『創立拾七年沿革略史』(1937 年、22-16 頁)。

[7] 大阪市立高等西華女学校『創立拾七年沿革略史』(1937 年、22-44 頁)。

戦前期日本の女子専門学校の教育理念及び教育内容⑨
女子英学塾の宗教教育②

ママトクロヴァ・ニルファル（早稲田大学）

前号では、女子英学塾の創立者津田梅子のキリスト教とのかかわりや彼女の教育思想にみるキリスト教の影響などについて考察したが、本号では女子英学塾において宗教教育がどのように行われていたか、検討する。

同塾は、宗教的な教えがカリキュラムに入っていなかったことが特色である。授業の内容を探ってみると、聖書などがよく使われているが、科目としては宗教関係のものは何も存在していないことが確認できる。

では、女子英学塾でキリスト教色はどのように表れていたのだろう。創設の際は、学則などでキリスト教に関して一切触れず、英語教育のみを取り上げていた。真の教育は人格の接触によると信じていた津田は形式にこだわらなかったためと考えられる。また、教育と宗教の分離を望んでいた文部省の教育方針が顧慮されたのだろう[1]。しかし、同塾が 1904（明治 37）年に社団法人を設立する際には、法人の目的は「本社団ハ基督教主義ニ基キテ女子ニ高等教育ヲ授クルモノトス」となっている。これは津田の素志を法的に定めたものと考えられる[2]。

1900（明治 33）年 9 月 14 日の開校式は教育勅語の奉読、賛美歌の斉唱、祈祷、英語での聖書朗読、津田の式辞、君が代斉唱の順に行われている。勅語奉読と君が代斉唱はどのような学校でも行われていたものであったが、賛美歌の斉唱、祈祷、聖書朗読は塾ならではの特色であった。以上の式次第は 1907（明治 40）年まで継続されたが、同年 3 月に卒業式の礼拝形式は廃止され、そして 1909（明治 42）年からは礼拝形式は英学塾のその他の式典からも廃止された。これは、既述の教育と宗教との分離を望んでいた文部省の意向の反映や国家主義的な教育方針の強化などの影響と思われる。

しかし、聖日をとくに重視していた津田は、礼拝を式典に先立って行わせ、寄宿生は朝の礼拝を教会において行い、午後は塾で開かれる日曜学校に全員出席しなければならなかったとされている[3]。

毎朝の礼拝は教員たちが交替で受け持っていた。「津田先生」は必ず出席し、生徒もほぼ全員出席していた。この礼拝では「心が清められて、賛美歌を歌って、短く聖書を読んでいた」と記されている[4]。毎週日曜日の朝は教会に行くことになっており、寄宿生はもちろん、通学生も出来るだけ参加していた。日曜日の午後はその教会の牧師が学校に来て聖書の特別な講義をした場合もあった。このような行事を行うために、土曜日も休日となっていた。以上のような行事から、女子英学塾では宗教的行為は盛んに行われ、キリスト教は生徒たちの生活の中に浸透していたことが窺える。

宗教的行事はおおよそ以上のようなものであったが、津田がもっとも力を入れていたのは教師と生徒の人格の接触により、キリスト教的精神の豊かな大学生活を作り出そうとすることにあった。これについて吉川利一の見解を紹介したい[5]。

> 女史の根本信念によれば、真の教育は形式によるにあらず、人格の接触によつて行はれる。女史にこの自信を与えたものは、幼少の頃から敬虔な宗教的雰囲気の内に養成せられ、不知不識の間に鍛ひあげられた基督教的品性である。女史の信仰は装飾ではない。輸入や翻訳の宗教ではない、玲瓏玉の如き品性に体現せられている。私は思ふ武士道の素質を受けた女史が霊の洗礼を受けたならば、恐らくこのやうな品性を得やうと。又思ふ女史の一生の事業は帰するところその純一清浄な品性の表現であると。

ここからもわかるように、津田は「真の教育」は形式ではなく、実際の人格

の接触によってはかられるものと考えていた。塾の教育に宗教的形式を採用しなかったものの、津田はミス・ベーコン、ミス・ハーツホンなどの協力のもと、キリスト教の精神に基づく生活の創造と基督教による強い精神力の育成に心を砕いたと考えられる。そして女子英学塾は多くの「クリスチャン」に支えられて発展したことも事実である。

宗教的な行事として、休日の日曜日は特に決まった規則がなくても、生徒は近くの五味坂の聖公会か富士見町教会へ礼拝に通っていた[6]。また、日曜日の午後はその教会の牧師が学校に来て聖書の特別な講演をしていた[7]。そして、グラブ活動のようなもので、キリスト教女子青年会の活動があった。女子青年会本部から教師ら、ミス・マクドナルド、ミス・カフマン、ミス・レイガンなどが女子英学塾に来て生徒たちを指導していた[8]。

これら宗教関係の行いは特に規則になっていたわけでもないが、生徒たちは積極的に、自主的に参加していたと多くの卒業生が回想している。そのほか、既述したように、同塾においては毎朝礼拝が守られ、授業中に聖書や賛美歌を使用することが多かった。何の規則もなく、教理や教義もなく、生徒の多くがキリスト教を自然に吸収していった。そして多くの卒業生が洗礼を受け、キリスト教に深いかかわりを持つことになったのである。

これに関して卒業生の宮島ぶんは次のように思い出を語っている[9]。

> …そして、いよいよ学校を出る間際になって私も富士見町教会で植村正久牧師から洗礼を授けていただきました。英語を教えていただくために津田へまいりまして、私にとってはそれ以上のものを教えていただいたような結果になりました。

また、森ちゑは「私が今まで信仰を続けていますのは、そのご指導によるものと存じます。無論、私は中途で挫けたことも度々ございますが、とにかく、宗

教、いわゆるキリスト教を私は一生の伴侶として、今も教会に行っております」と述べている[10]。このように、女子英学塾の寮生活の中で、宗教的精神が養成されていた。宗派によらない丁寧な指導はなされていたとしても、強制的な指導はなされず、それにもかかわらず生徒はキリスト教を自然に吸収し、「一生の伴侶」として向き合っていった。

女子英学塾の寮は単なる「寄宿舎」ではなく、実践の場として利用されていた。自由主義に基づく自治・独立心が育成され、家庭で役立つ訓練も実行され、宗教的な精神も培われたのである。

---

[1] 吉川利一『津田梅子伝』、津田塾同窓会、1956 年、p374
[2] 『同前書』、p374
[3] 津田塾大学編『津田塾六十年史』、1960 年、pp115～116
[4] 津田塾大学編『津田塾オーラル・ヒストリー・シリーズ　卒業生に聞く』第 8 号、1990 年、p10
[5] 吉川利一『津田梅子』、婦女新聞社、1930 年、p274
[6] 津田塾大学編『津田塾オーラル・ヒストリー・シリーズ　卒業生に聞く』第 1 号、1980 年、p4
[7] 同前資料、p11
[8] 同前資料、p4
[9] 同前資料、p4
[10] 同前資料、p11

学生寮の時代⑫
―旧制中学の寄宿舎（生徒の生活空間）―

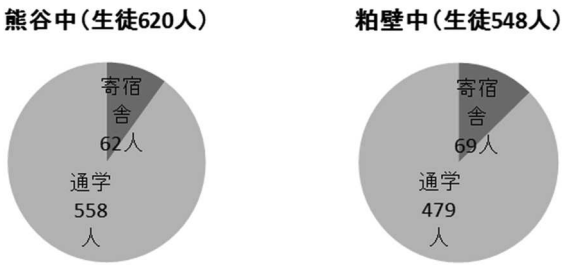
金澤（かなざわ）　冬樹（ふゆき）（東京理科大学職員）

■管理されたスケジュール

先月号では、埼玉県の旧制中学（浦和中・熊谷中・粕壁中）の寄宿舎について舎監に焦点を当てて考察した。今回はそれを踏まえて、浦和中を中心に、寄宿舎における生徒の動きを見ていくことにしよう[1]。

まず、寄宿舎にはどれほどの生徒が入舎していたのか。通学・寄宿舎など、詳細な生徒数の記載がある熊谷中[2]と粕壁中[3]について見てみると【表 1】の通りになる。

【表 1】全校生徒に占める寄宿舎生の割合



※1918 年 11 月 1 日現在　　※1917 年 10 月末現在

両校とも、寄宿生は 1 割ほどだったことが分かる。全校生徒に比べて寄宿生はそれほど多くはなかったようだ。これは両校の立地・交通事情なども要因と考えられるが、割合についての評価は様々な学校との比較がなされてから判断されよう。

ともあれ、寄宿生はどのような生活を送っていたのか。浦和中の寄宿舎で

は「舎内ニ於ケル起居ハ総テ所定ノ時間ニ従フヘシ」[4]と規定されているように、時間が厳しく管理されたものであった。おおよそのスケジュールは【表 2】の通りである。

【表 2】旧制浦和中学寄宿舎における 1 日のスケジュール

5:30	朝食まで	6:00	6:20 ～6:50	12:00	放課後 ～16:40	夕食まで	17:00	18:00 ～19:30	20:00 ～21:00	21:30
起床	朝礼	朝食	随意 自習	昼食	門限	入浴	夕食	第一 自習	第二 自習	就寝

※始業が 7:00 の場合のスケジュール。
※土日祝日や休日前日は門限が 17:40 まで、夕食 18:00、自習は随意。

「起床後直チニ寝具ノ整頓ヲナスヘシ」「許可ナクシテ就寝スヘカラス」など、時間に正確な行動が定められており、さまざまな場面で人員検査、清潔検査、物品検査が行われるなど、時間・行動ともに厳しく管理されている印象がある。熊谷中、粕壁中も同様で、「寄宿舎内ニ於テハ晨起就寝入浴外出等凡テ規定ノ時間ニ依ルヘキモノトス」（粕壁中）[5]など、時間割とともに生活が区切られていることが伺える。

■生徒の役割と舎監

浦和中の寄宿舎運営では、生徒に様々な役割が担われ、組織も整えられている[6]。まず各室に室長、副室長が各 1 名置かれていた。任期は 1 学年間とされ、室長の任務は「室員ヲ誘掖善導シ舎内風紀ノ維持改善ニ勉ム」「命令ノ伝達ヲ掌リ其ノ実行ヲ期ス」「室内ノ清潔整頓並ニ衛生ニ注意ス」「室員ノ和親ヲ図ル」などが挙げられている。また、各室が 1 週間輪番で週番（室）の任に当たっていた。主な任務は、舎内の「風紀規則ノ維持改善」、清潔整頓、各検査における舎監の補佐、週番日誌の記入などである。

寄宿舎における生徒の役割を考える際、舎監との関係は注目される。そもそも、室長・副室長は生徒の互選などではなく「舎監ノ推薦ニヨリ学校長之ヲ命ス」とされていた。また「室長ハ舎内ノ事務ニ関シテ舎監ノ諮問ニ応シ意

見ヲ申告ス」と定められている。特に舎生の合議組織の定めが記載されていないことから、舎監が大きな権限を持っていたことが伺われる。

粕壁中でも舎監の権限は大きかったようで、「寄宿舎生徒タルモノハ本校諸規則ヲ遵守スヘキハ勿論常ニ舎監ノ監督ニ服従シテ能ク其ノ本分ヲ守ルヘシ」と規定されているほどである[7]。

■自炊制と生徒の役割

ただ、生徒に一定の権限が認められていた役割もあったようだ。それは自炊制に関する部分であり[8]、浦和中・熊谷中・粕壁中各校によって程度の差がある。

浦和中[9]では「炊事ハ衛生及経済ニ適セシメンカ為メニ自炊ヲ行ヒ炊夫若干名ヲ傭ヒ」炊事に当らせるとある。「炊事ハ舎監之ヲ監督シ週番之ヲ補佐ス」とされ、週番室が献立表を作成して舎監の「査閲」を受けることになっている。物品購入・支払いは舎監が行い、購入物品は週番室長が「検閲」して舎監に報告する形を取る。

熊谷中では炊事委員が置かれている[10]。炊事委員は各寮週番室の 3 年生以上の生徒が当たり、任期は 1 週間である。「舎監ノ監督ヲ受ケテ」としながらも、浦和中に比べて炊事に関する多様な任務が担われている。「献立表ヲ作ルコト」「食物ノ良否ノ検閲ヲナスコト」、（浦和中では舎監が行っていた）「物品ノ買入」、その他にも「帳簿ヘ記入」「毎月ノ収支決算ニ関スルコト」などだ。興味深いのは「物価ノ高低ヲ調査スルコト」にも生徒が当たっている。

■中等教育における寄宿舎の実態とは

以上、寄宿舎における生徒の動きを見てきた。もちろん規則上の記述に過ぎないため、実際に生徒がどのような生活を送っていたのかは今後検討していく必要がある。各校の規則などでは『舎監日誌』や『週番日誌』の存在が

確認でき、仮にこれらの資料が現存すれば、寄宿舎生活の実態解明の一助になるはずである。

本連載でたびたび取り上げている広島高等師範学校教育研究会編『中等学校寄宿舎研究』(1908 年)[11]では、全国 224 校にのぼる中等教育機関(旧制中学、師範学校、実業学校など)の寄宿舎が分析対象になっている。これほど中等教育機関に広がりを持っていた寄宿舎であるが、その全容を明らかにするのは簡単ではない。今後は、年代・地域・学校種などの種類別に実態の分析を進め、比較などを行う必要があるだろう。

---

[1]『埼玉県立浦和中学校一覧』1920 年、『埼玉県立熊谷中学校一覧 大正八年一月』1919 年、『埼玉県立粕壁中学校一覧 大正七年三月』1918 年をもとに検討する。それぞれ以下、『浦中一覧』『熊中一覧』『粕中一覧』。

[2]「寄宿及通学生表」『熊中一覧』p115-116。

[3]「生徒学年別人員表」「寄宿舎生徒人員表」『粕中一覧』p76-77。

[4]「寄宿舎規則」『浦中一覧』p63。

[5]「寄宿舎生徒心得」『粕中一覧』p38。

[6]「寄宿舎規則」『浦中一覧』p61-62。なお興味深いのは、舎生独自の親睦組織である。浦和中には校友会として麗和中学会があったが、他に「舎生ノ修養及親睦ヲ図ルヲ以テ目的」とし「舎監及舎生ヲ以テ組織」する済美会があった。「済美会会則」『浦中一覧』p86-87。

[7]「寄宿舎生徒心得」『粕中一覧』p38。

[8]自炊制は寄宿舎運営において重要な要素であり、その様態に寄宿舎の特徴がよく見て取れる。高田知和「学生寮の生活史一食と賄方の観点から」日本生活学会『生活學論叢』13 号 2008 年を参考。

[9]「寄宿舎規則」『浦中一覧』p65。

[10]「寄宿舎規定」『熊中一覧』p64-65。

[11]広島高等師範学校教育研究会編『中等学校寄宿舎研究』金港堂 1908 年。

どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（19）
―東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その3)―

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

前号では東京府立第一中学校長川田正澂が、イギリスのパブリックスクールなどを見聞して1914年（大正3年）に帰国した後、どのような教育観を表明していたのかを紹介した。川田は、生徒を干渉束縛するのも、生徒の勝手気ままを容認するのもどちらもよくないとして、英国の教育のように、生徒の自治自制に任せられるようにしていくことを目指していた。

こうした考え方が同校の校友会組織（学友会）に関する方針とどのように関係したのかを本号で検討していく予定であった。しかし、帰国直後の川田が土佐協会の寄宿舎の管理方針に自治を導入しようとして強く主張したことがあったことを示す史料を見つけたので、以下、それを紹介しておきたい。

川田は帰国直後に土佐出身者のための育英団体である土佐協会の理事として、協会の寄宿舎の監督役を引き受けていた時期があったようである。軍隊式取り締まりをやめて自治自制の精神を育てていこうとした川田は、軍人が多数を占める他の理事たちの反発を受け、土佐協会の理事と寄宿舎監督役を辞めさせられたようである。それから約10年後の1925年（大正14年）には川田に対する土佐協会理事たちの態度は軟化したようで、川田は土佐協会の寄宿舎で演説をおこなっている。以下は、その演説の一部である。

> 私は大正四年に一寸の間監督の任に膺つた事があります。当時私は欧羅巴から帰朝して、間もない時でありました。私は深く英国の学風に憧憬し、是非其の主義精神を我が国の教育に採用したいと思つたのであります。私は郷党の先輩特に協会の理事が時々此の寄宿舎に来つて

学生と晩餐を共にし、談笑の間に学生を善導し、其の品性を向上さすべきものである。命令規則を以て之に臨むは学生の修養上害あつて益ないことを主張しました。然るに当時の土佐協会は陸海軍の軍人が勢力を占めて居りまして、此の寄宿舎を軍隊的に陸軍幼年学校式に、海軍兵学校式に、取締らんとしたのであります。そこで私の主張は一も二もなく排斥され、私は監督の職も解かれ、協会の理事もやめられ、其の以来私は全く協会と縁を絶ち以て今日に至つて居るのであります。

私が斥けられて後、此の寄宿舎は多数の人が代わる代わる舎監となり、軍隊的に監督して見たがどうも思ふやうに行かないで、いづれも逃出し、結局当初私が考へて居つた通り、寄宿舎監督は軍隊式では行かない、先輩は命令にあらずして只相談相手となり、学生をして自治的にやらす外ないと云ふことを時が解決した。当時毛虫のやうに嫌はれた私が、今日再び茲に来つて諸君の前で講演するのも誠に奇しき因縁であると思ふのであります[1]。

イギリスから帰国した頃の川田は、軍人の理事との対立を怖れず、軍隊式の取り締まり方針の撤廃を激しく主張したようである。大正デモクラシーの時代が始まっていたとはいえ、かなり思い切った行動であったと思われる。こうした情熱をもっていた川田が府立第一中学校でどのような方針を展開していったのかを次号で見ていきたい。

---

[1] 川田正澂『水軒撃壺』東京府第一中学校校友会、1926年、30頁～31頁。

《開催報告》

旧制高等学校記念館「第21回夏期教育セミナー」

8月27日(土)・28日(日)

金澤（かなざわ）　冬樹（ふゆき）（東京理科大職員・記念館資料研究会）

■90歳から10歳代まで

旧制高等学校記念館（長野県松本市）は、旧制高校の資料を収集・展示している全国でも珍しい市立の博物館です。記念館では毎年夏、講演会・交流会・研究発表会などを通じて教育や学生文化について考える「夏期教育セミナー」を開催しています。一般市民や研究者、90歳前後の旧制高校卒業生から10代の学生まで、幅広い参加者が全国から集まるユニークなイベントで、2日間にわたって開催されます。

■初の応援団シンポジウム

21回目を迎えた今年。1日目はシンポジウム「応援団の歴史と現在」が開催されました。これまで学術的に振り返る機会がほとんどなかった応援団を、様々な角度から照射してみようという企画です。

松本深志高校応援団管理委員会の演舞

鳥取大学の瀬戸邦弘准教授(スポーツ身体文化)は応援団の空間や身体を文化人類学などの視点から考察。上武大学の堤ひろゆき助教(日本教育史)は、旧制松本中学の事例から応援活動の変遷を、本郷学園中学高校の横尾朗大教諭(同校応援委員会監督・國學院大學全學應援團監督)は教育現場におけ

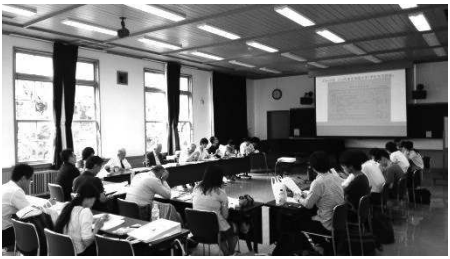
る応援団活動の実践について、報告しました。

また、特別ゲスト・松本深志高校応援団管理委員会の皆さんが応援演舞を披露。勇壮な掛け声や独特の所作を披露していただき、会場からは大きな拍手が起こりました。シンポジウムには松本市民や研究者はもちろん、全国から多数の応援団関係者にお越しいただき、質疑応答も白熱するなど大盛況でした。

■懇親会

シンポジウム終了後は恒例の懇親会(希望者)。旧制高校卒業生による寮歌披露などもあり、世代を超えた交流が生まれました。さらに記念館近くの料理屋の2階を借り切っての二次会。初対面の方も多い中、夜遅くまで自由な意見交換が行われました。2日間の開催ということもあり、「合宿」のような雰囲気があるのも本セミナーの特長です。

■研究発表会



例年通り、2日目は研究発表会が開催されました。山本尚史氏(長崎女子短期大学助教)「戦前の『学生生活調査』に関する基礎的研究」、三羽光彦氏(芦屋大学教授)「旧制高等学校の学校制度上の位置と性格」、折茂克哉氏(東京大学駒場博物館)「東京駒場博物館における第一高等学校資料の活用」、丹羽みさと氏(同)「一高資料に見る近代作家の活動」、井戸美里氏(京都工芸繊維大学講師)「一高伝来の

『歴史画』について」、という多様な研究課題について、最新の研究成果が報告されました。

■旧制高校卒業生との交流

旧制高校卒業生により、記念館展示と旧制松本高校校舎の見学会も行われました。文献ではなかなか知ることのできない友人関係や寮生活の裏話など、実際に卒業生の方にお話を聞く貴重な機会になっています。

■研究情報交換会

今回新しく設けられた企画。セミナーにせっかく参加しながらも、お互い自己紹介することなく会が終わってしまうことも多いため、参加者それぞれの研究関心や活動を報告する機会を新設しました。各人が積極的に発言し、参加者の多様な問題関心を知る機会になりました。

今年の夏期教育セミナーも、初めて参加される方が多く、特に若い研究者や学生の方に多数お越しいただきました。世代、職種、問題関心など多様な分野の方と交流し、教育や学生文化について考えを深めることをめざす本セミナー。来年も今年と同じ時期に開催予定ですので、ご来場を心よりお待ちしております。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

編集後記

今や人気と勢いのあるアニメ@DAYSでの印象に残る1駒。部活未経験者でありながら、私立の名門聖蹟高校サッカー部にいきなり入部した主人公。部員の大半がスポーツ推薦も多いなかで、一般入試のなかでさらにスポーツ未経験者という始末。「運動神経壊滅的にダメじゃん。愚鈍過ぎ、不器用過ぎ、頭悪過ぎ。気付け!分相応の他の道を探しなよ。」といわれながらも、主人公は「僕が全部間違ってるのは分かっているんですけど。僕は平凡でバカで何の取り柄もないと分かってるので。でもだから、だから命かけて僕は生きたいんです!」といって直向きに努力し続ける。その主人公の一途な姿が不思議と周りの頑な考えを変えていく切っ掛けに。「人が本気で挑戦して努力してなせないことなんて、この世に1つもない。途中で皆挑戦をやめるから、まるで失敗したように写るんだ。」(http://days-project.jp/)と。(谷本)

一年があっという間です。今年も松本です。旧制高等学校記念館の夏期教育セミナーに参加いたしました。松本深志高校応援団、研究発表、記念館見学…、たいへん楽しい時間でした。また来年のセミナーが楽しみです。

(山本剛)

先日、都内で開催された学生寮のイベントに参加してきました。多くの大学関係者が参加しており、昨今の学生寮見直し機運を肌で感じました。

(金澤)

10月2日の学会発表の予告編を今号で、と思っていましたし、それを期待してくださっている方がある向きも伝わっておりましたが、学期変わりの雑務の多さと現時点では口外できない特殊な事情のために、今号も原稿を落としてしまいました。次号あたりには新生小宮山の姿(原稿?)をお見せできると思います。皆さま申し訳ありません。(小宮山)

今号から執筆と原稿のチェックをさせていただくことになりました。よろしくお願いいたします。秋の気配をひしひしと感じる時期ですが、そうなると教育実習・保育実習も大詰めです。数字だけでは表せない学生の成長を感じる楽しい時期ですが、どうしても数値化しなければならない困難さに悩む時期でもあります。（山本尚史）

後期の授業で140名のクラスができてしまいました。普段は多くても1クラス80名ぐらいであったのに対して140名はかなり多いです。以前、「大人数授業でも学生間の話し合いや発表を中心とした授業ができる」という趣旨の文章を書いたことがありますので、エネルギーが必要ですが、なんとか有言実行でいきたいと思います。意見の多様性など、大人数のメリットをなるべく活かした授業を工夫してみたいと思います。（冨岡）

本ニューズレターを印刷される場合、Adobe Reader などの「小冊子印刷」機能を使って A4 サイズ両面刷りにすれば、ちょうど A5 サイズの小冊子になります。